

〈中山先生の思い出〉

遠くて近い存在

— 中山先生とわたし —

荒木正純

わたしは、中山先生といちばん近いところにいた。といえば、普通こうした場合、学問的にいうのであろうが、そうではない。わたしの専門は、西洋古典学ではなく、イギリス文学で批評理論を中心としてきた。だから、その近さとは文字どおり空間的な近さである。この数年間、研究室がお隣りであった。

しかし、精神的にいえば、いちばん遠いところにいたような気がする。それは、先生を嫌っていたというのではない。イギリス文学は近代文学であり、学問の歴史からいえば、二十世紀にやっと体制ができた成金的な学問分野であって、西洋古典学はれっきとした老舗なのである。イギリスで国文学が学問の仲間入りをしようとしたとき、いちばん反対したのは古典学に従事する人々であった。わかる気がする。だから、いまでこそ世界のキャンオンとして確立し、一大産業化したシェイクスピアの研究分野にかかわりをもつ者であっても、それは学問的にはどこかいかさま臭いのである。ちなみにシェイクスピアはラテン語は初歩程度、ギリシア語はからっきしだめであったとされる。まして、わたしの場合、その程度までも至ってはいない。シェイクスピアをやっていますといえ、イギリス文学の世界では、一応、おっと思われるのであるが、古典学の隣りに並ぶと、その悪趣味さが目立ってしまう。その関係が、中山先生とわたしの関係ではなかったかと思える。

基本的にはそうした関係がありながら、大いに親近感もあった。古典語だけでなく、古典学の学界の様子は全くわからないので、中山先生はただお隣りの先生にすぎなかった。あるとき、その筋の人から聞いたところ、日本で屈指の方であるということであった。そう聞きくと、二重に疎遠になりそうであるが、実際はそうではなかった。その実感はもてなかった。それは先生のお人柄のためで、屈託のない、決して偉ぶることのない方であるからだ。一例をあげる。わたしは、英語で書かれた歴史の本の翻訳をしていて、わからなかったラテン語を気軽に聞いてしまった。こんなものもわからないのか、といわれそうだと恐れることなく。即座に、これは

中世ラテン語でしょう、とおっしゃる。そうです、中世の文献のもので。古典語と違うんですね。あ、そうですか。それでも次にお会いしたとき、説明してください。おかげで、英語の訳の方は怪しくても、ラテン語に関しては安全なものできた。

このように、わたしの先生との関係は重層的なもので、遠くて、しかも近い存在であった。空間的だけでなく、精神的にも。わからないことは、すぐに教えてもらえるというありがたい存在であった。

〈中山先生の思い出〉

意味の意味

藤谷道夫

中山先生が1990年4月に筑波大学に着任された年、私は博士課程の最終年次に在籍しており、翌年には大学院を出て、住居も東京に移すこととなりました。それゆえ、普通であれば、その後先生の授業に出席することもなかったことでしょう。もし先生が西洋古典の専門家でなく、また日本におけるラテン詩の第一人者でいらっしやらなかったならば。以来、4年間以上も筑波の先生の研究室に毎週1回大学院の授業を受けさせて頂きにあがりました。最初の1年間の授業で、十二分なショックを受けていましたので、往復に6～7時間を費やそうとも、それは当然の選択でした。この事実ひとつだけもってしましても（また、私の未熟なラテン語力を差し引いたとしても）、先生の学問の貴重さが分かって頂けるかと思います。帰りのバスや電車のなかで、その日に先生からお聞きした話を頭のなかで幾度も反芻しながら時間を過ごしたことを今もよく覚えています。筑波から帰宅した夜、もっとも楽しみにしていたことと言えば、先生が授業で述べられたことを一言でも忘れないように、フロッキーに書き入れて清書することでした。（ですから、私のフロッキーのなかには先生の記憶が細大漏らさず記録されています。）授業を通して、自分よりも30年もラテン語を読んでこられた先生の30年分の知識を《無料》で、しかも《労力なしに》頂けるのですから、これくらい虫の良い勉強法はありません。通学が苦にならなかったのもこの喜びのためです。先に、ショックと書きましたが、それは「驚き」と「喜びの」と言った方が適切でしょう。

先生の授業は知識の披瀝であったり、奇を衒うようなものではありません。知識を自らの体験と思索を通して、御自分の言葉で述べられるものであり、常に示唆と含蓄に富むものでした。また、物事の本質を飾りけのない言葉で表現されるために、授業はととても自然なユーモアに包まれていました。こうしたユーモアあふれるお話を聞きするのも、実のところ、通う楽しみの一つでした。先生の含羞を堪えられた謙虚な御人柄と学問は相通じているように思われます。決して流行の見方に流されることなく、あくまでもテキストを、単語の一つ一つをどれだけ正確に、し

かも深く読み込むかをもっとも重視した、正統的なアプローチをなさっておられます。(強いて申せば、意味論的アプローチにもっとも近いと言えるかも知れませんが。)そして、他人が作った既製の簡便な方法論に依拠しないこうした読みこそ、結局、もっとも読み手の実力が問われる読みだと思えます。先生の手にかかると、1つ1つの単語の意味が生きてきて、その意味が明瞭に会得されてきます。もちろん、私も毎回予習をしてきていますから、単語の意味は知っているのですが、意味の持つ意味が違うのです。物の名詞一つとってみても、私たちが形さえどう思い描いてよいのか分からないまま単に伝聞で知っている場合と、実際に自分の目で見、触って知っている場合の違いと同じように、言葉の持つ感触そのもの違いと言ったら良いでしょうか。古代ローマで実際に暮らされた先生と、2千年後の時代に本だけで知っている自分との違いにたとえれば分かり易いかもしれません。要するに、単に単語の意味を知っているという表面的な知識と深いレベルからその意味を知悉しているのでは、無限と言えほどの隔たりがあります。毎回の授業で目の前に開示されるこうした発見の虜になった私は、結局、先生の引力圏に捕らわれた彗星のように何年も筑波との間を往復することになりました。私はともかく一歩でも先生に近付きたいとの思いから、当時授業で読んでいた『アエネーイス』の入手可能なすべての注釈書を7~8種類取り寄せ、毎回それで予習をして通っていたのですが、それでもなお新しい発見があるのです。つまり、授業では注釈書や辞書に書かれていない知識が説明されてゆくのです。今までの研究者たちとは違った視点・解釈も提示され、蒙が開けるとはこのことかと思いました。こうなってきますと、先生の御持ちの知識を吸収できる限り吸収したいという思いに駆りたてられ、どんな簡単な事も、どんな些細な事も、根掘り葉掘り何うことが習慣となりました。予めこちらでだいたい分かっていることも、愚問でも何でも、ともかく伺っていくのです。こうすることによって、その質問から別な話に移ったり、それと関連した別な御話が伺えるからです。(ある意味で、エッカーマンとの対話は示唆的です。彼の単純な質問からも話が思わぬ方に展開して、新たな地平が開けてくることがあります。当然、彼自身もある程度答えを準備することができるような質問もあるはずですが、それでもゲーテに尋ねるのは、こうした展開を期待してのことかと思われるのです。)

先生の研究室で学ばせて頂いたことを書き出せば、学問研究のスタイルから始まって分析の方法、個々の知識、先生の御人柄に至るまで尽きることがありませんので、それとは別に最後に1つだけ私自身が先生の授業の後いつも感じていたことを述べさせて頂くことにします。

私は知識には3つの次元があると考えますが、一つはある分野における知識の量

であり、一つは他分野に広がる知識の広さであり、最後にその知識の持つ深さです。この深さは洞察力とも言い換えられるかも知れません。私は先生の授業において最初の2つの次元は言うまでもなく、3つ目の次元、すなわち、ラテン詩を実地に深く読むことを教わりましたが、また同時にこの深さは豊かさであることも学びました。深さ（豊かさ）は量や広さと同じではありませんし、また、奥行きを平面図形で直接触れることができないように、それらに置き換えることもできません。たとえば、私がコンサートでバッハであれモーツァルトであれ、自分の良く知った曲を素晴らしい演奏で聞いたとしましょう。私は、この音楽を聞く前と後で、知識が増えたのでしょうか？曲そのものは前から知っていたのですから、知識の量が増えたわけではないでしょう。知らない作曲家の知らない曲を聞いたわけでもないの、知識が広がったわけでもありません。しかし、どこかが違うのです。知っていることは同じでも、知っている意味が違うからです。素晴らしい演奏を聞いた時には、心が満たされ、豊かになったと感じます。何か新しい発見をしたように、味わうべき深さがあるからです。同じ音を知っていても、その音を聞く前と聞いた後ではもはや同じものではないのです。これと同じように、私も、同じ『アエネーイス』を自宅で一語一語読み、単語の意味も、物語の筋も知っていながら、先生の研究室から出てくるときには、新しい演奏が奏でられたコンサートの会場を後にしたときと同じものを感じていたのです。

〈中山先生の思い出〉

Vita Contemptrativa

平野陽一

西洋古典の研究室には一種独特の空気が流れている、と言われることがある。新奇で派手な理論が飛び交うこともなく、古典語で書かれた原書をただ読み暮らす日々ではあるが、中身空疎な偽物の喧噪かまびすしい昨今、研究室に一歩足を踏み入れるとき、外部の雑音は遮断され不思議と気分は落ち着く。そして原典と辞書と注釈書が醸し出すこのような古典学研究室の雰囲気は、大学を異にし研究室を主催する先生が変わっても、また主専攻が文学であっても哲学であっても、何か共通したものを感じさせることは確かである。以前、それを称して「古き良き日の大学のアカデミズムの香り」と言った人がいた。かつての大学が全体として漂わせていた雰囲気に対する郷愁が彼にこの言葉を語らせたのであろうが、残念ながら、「古き良き大学」なるものが実際に如何なるものか私には分からない。

ところで、このアカデミズム——アカデミーという言葉が、その昔プラトンがアテナイ郊外の聖域アカデメイアに創設した学園の名に由来することは今更言うまでもないだろう。そして、アカデメイアで追究された学がどのような精神に裏打ちされていたのか、その様子的一端をプラトンの師ソクラテスと同時代人で、彼から思想的にも影響を受けたと伝えられる悲劇詩人エウリピデスの次の断片詩に窺うことができる。

幸せである、誰であれ探究の道にすすみ
市民たちを害することにも
不正な行いにも向かわずに、
不死なる自然の不変の秩序を眺め、
それが如何にして、何から、何によって形成されたかを観照する者は。
かかる人々は、卑しい所業に思いを巡らすことは決してない。 （断片910）

宇宙万有の在り方を観察することは、人間としての理想的な在り方、生き方を模索

し実践することと決して無縁ではない。自然本性の探求とその理論的観照が、人間の生の実践と不可分一体のものとして結びついているという認識は、哲学者ならぬエウリピデスのような一介の詩人においても徹底して把持されているのである。我々が昔日の大学に対する郷愁を古典学の研究室に感じるのも、古典古代の人々の書き残したテキストをひたすら読みとくという、ごく素朴な行為を通じて、今日では省みられることのなくなったいわば学原風景を垣間見ることができるからではないだろうか。

そして、本年三月をもって筑波大学を定年退官される中山恒夫先生もまた、真の古典的教養を身につけた「幸いなる」西洋古典学の研究者の一人である。

* * *

中山先生はその謙虚な御人柄の故か、ご自身の仕事についても口にされることは滅多になかったが、あるとき、こんなものを書いてみたのだが、と雑誌論文の抜刷を戴いたことがある。見れば、新たに出版されたウェルギリウスに関する研究書に宛てた書評であり、「ウェルギリウスを自分の言葉で自分の言葉で語られる人が日本にも現れた」ことを慶賀する祝辞のあとに次のような言葉が続いていた。

自分の言葉で語るとは、他人の言説を無視して自分の考えを自由に述べることではない。これでは自分の言葉であることの歴史的検証が欠落している。ウェルギリウスが構築した詩的世界をより正しく理解し、人間と自然と歴史と世界についての彼独自の見解をより良く知るためには、そうしてそれに関する自己の研究の独自性を確立するためには、第一に読書百遍、ウェルギリウスのテキストを精読しなければならないことは言うまでもないことであり、第二に、彼の教養源であったギリシア、ローマの文学と哲学のすべての作品を精読し、宗教、美術、歴史にも通じていなければならないことももちろんであるけれども、それだけではなく、第三に、2000年にわたる受容と研究の成果を学び、それを批判的に受け入れて自己の視野を広げ、同時にそれによって、研究史上に占める自己の研究の位置と意味とを明確にすることも必要なのである。

ここに言われていることは、すべて我々が肝に銘じておかねばならないことばかりであるが、あらためて指摘されてみるとやはり厳しい言葉である。この一文を読んだとき、正直言って私は、自分の前に立ち塞がる山の高さに呆然とし、自分の不勉強を省みては溜め息が出た。それはちょうど修士論文を提出してまだ間がない頃だ

ったように記憶している。

「ウェルギリウスに関する論文は三日に一本出ている」、が日頃の先生の口癖だった。発表されたすべての研究論文をあまねく熟読することは容易ではない。先生御自身が自分に課しているこの厳しい姿勢は、学問研究に対する謙虚な態度にそのまま繋がっている。そして、それは普段のラテン語講読の授業にも反映されていたように思われる。だから、先生が叙事詩に登場する英雄の活躍や美姫との色恋をユーマラスに描写するときでも、原典の一文一文、一語一語の意味をおろそかにすることなく、正確な訳を心がけた上で、さらに「自分の言葉で」語っておられたのである。

* * *

中山先生が退官される前々年の一年間、公務でお忙しいなか、ピングロスの祝勝歌の講読を個人的に強いてお願いしたことがある。ギリシア抒情詩の中でもとりわけ難解なこの詩の解釈に悪戦苦闘する出来の悪い学生を相手に、先生は厭な顔ひとつせず熱心に付き合ってくれた。先生の導きのもとに、わずかばかりでも「探究の道」に踏み出すことのできた私もまた、無上の「幸い」を感じた一人である。